

**[A年]受難節第5主日(2025年4月6日)****[旧約聖書日課] 創世記 25章29～34節**

<sup>29</sup>ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。<sup>30</sup>エサウはヤコブに言った。

「お願いだ、その赤いもの(アダム)、その赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。<sup>31</sup>ヤコブは言った。

「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください。」

<sup>32</sup>「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」とエサウが答えると、<sup>33</sup>ヤコブは言った。

「では、今すぐ誓ってください。」

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。<sup>34</sup>ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。

**[使徒書日課] ローマの信徒への手紙 8章1～11節**

<sup>1</sup>従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。<sup>2</sup>キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。<sup>3</sup>肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。<sup>4</sup>それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。<sup>5</sup>肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。<sup>6</sup>肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。<sup>7</sup>なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従いえないのです。<sup>8</sup>肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。<sup>9</sup>神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。<sup>10</sup>キリストがあなた

がたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。<sup>11</sup>もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

**[福音書日課] マタイによる福音書 20章20～28節**

<sup>20</sup>そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。<sup>21</sup>イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」<sup>22</sup>イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、

<sup>23</sup>イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」<sup>24</sup>ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。<sup>25</sup>そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振っている。<sup>26</sup>しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、<sup>27</sup>いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。<sup>28</sup>人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 創世記 25章29～34節

29あるとき、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れ切って野から帰って来た。30エサウはヤコブに言った。「その赤いもの、その赤いものを食べさせてくれ。私は疲れ切っているのだ。」彼がエドム〔訳→赤い〕と呼ばれたのはこのためである。31ヤコブが、「それでは今すぐに、兄さんの長子の権利を私に売ってください」と言うと、32エサウは、「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」と答えた。33ヤコブが、「今すぐ、誓ってください。」と言ったので、彼は誓って、長子の権利をヤコブに売り渡した。34ヤコブがエサウにパンとレンズ豆の煮物を出したので、彼は食べて飲み、そして立ち去って行った。エサウは長子の権利を軽んじた。

## ローマの信徒への手紙 8章1～11節

1従って、今や、キリスト・イエスにある者は罪に定められることはありません。2キリスト・イエスにある命の霊の法則〔別訳→律法〕が、罪と死との法則〔別訳→律法〕からあなたを解放したからです。3律法が肉によって弱くなっていたためになしえなかったことを、神はしてくださいました。つまり、神は御子を、罪のために、罪深い肉と同じ姿で世に遣わし、肉において罪を処罰されたのです。4それは、肉ではなく霊に従って歩む私たちの内に、律法の要求が満たされるためです。5肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思います。6肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和です。7なぜなら、肉の思いは神に敵対し、神の律法に従わないからです。従いえないのです。8肉の内にある者は、神に喜ばれることができません。

9しかし、神の霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉の内ではなく、

霊の内にあります。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。10キリストがあなたがたの内にいらっしゃるならば、体は罪によって死んでいても、霊は義によって命となっています。11イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてください。

## マタイによる福音書 20章20～28節

20その時、ゼベダイの息子たちの母が、息子たちと一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、願い事をした。21イエスが、「何がしてほしいのか」と言われると、彼女は言った。「私の二人の息子が、あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるとおっしゃってください。」22イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。私が飲もうとしている杯を飲むことができるか。」彼らが、「できます」と言うと、23イエスは言われた。「確かに、あなたがたは私の杯を飲むことになる。しかし、私の右と左に座ることは、私の決めることではない。それは、私の父によって定められた人々に許されるのだ。」24ほかの十人の者はこれ聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。25そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、諸民族の支配者たちはその上に君臨し、また、偉い人たちが権力を振っている。26しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、27あなたがたの中で頭になりたい者は、皆の僕になりなさい。28人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・4月6日「受難節第5主日」の日課主題は「十字架の勝利」。

・旧約日課は、「創世記」から、エサウが自分の長子の権利をヤコブに譲ると約束した逸話の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、霊による律法の働きを説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、ゼベダイの息子たちの母が息子たちのために特別な扱いを主イエスに願う箇所。

**旧約日課(創世記 25 章より)**

・「創世記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第一巻で、天地創造から始まる「原初の物語」(1~11章)と、アブラハムから始まる四世代の家族を扱う「族長物語」(12~50章)に区分される。「族長物語」は、物語構成上、第一世代のアブラハムの死までを扱う「アブラハム物語」(12~25章前半)と、第三世代のヤコブの誕生から死までを扱う「ヤコブ物語」(25章後半~50章)に区分される。さらに、「ヤコブ物語」は、ヤコブ自身の世代を中心に描かれる「ヤコブとエサウの物語」(25章前半~36章)と、ヤコブの息子らの世代を中心に描かれる「ヨセフ物語」(37章~50章)に区分される。「ヨセフ」は、ヤコブの11番目の息子。日課箇所は、「ヤコブとエサウの物語」の冒頭に置かれた、「誕生説話」に続く最初の逸話箇所。

・「創世記」に置かれた「ヤコブ物語」は、「出エジプト記」以降で展開する「モーセ物語」と共に、「イスラエル」のルーツを示す伝承物語として、旧約正典中で欠かせない重要な位置を占めている。「ヤコブ物語」において、ヤコブは、神と対面する体験を通して「イスラエル」の名を付与されたとき(創 32:29 および 35:10)、たびたび「ヤコブ」と並んで「イスラエル」の名で物語られている(同 35:21、37:3、42:5 など以下多数)。なお、「出エジプト記」から「士師記」までの物語では、「イスラエル」をヤコブの息子たちを祖とする「十二部族」の部族連合として描くが、「サムエル記」および「列王記」で展開する王国物語では、南王国ダビデ王家の「ユダ」とは区別される北王国の呼称、あるいは北王国を構成する諸部族の総称として「イスラエル」が用いられている。

・ヤコブは、アブラハムの子であるイサクとその妻リベカの双子の子の弟として登場し、その兄は「エサウ」である。エサウは、ヤコブと「長子の権利」あるいは「長子の祝福」を争った兄として描かれ、最終的には「エドム人」の祖として位置づけられる(創 36章。日課箇所 30 節に注意)。「創世記」は、ヤコブらの父イサクと異母兄イシュマエルとの関係同様、ヤコブとエサウの関係も、相続争いを親の争いとして描き、当事者については、父親の葬りにまつわる記事によって対等な扱いで描写している(創 25:8~9、同 35:29)。

・日課箇所の逸話の最後に「エサウは、長子の権利を軽んじた」という叙述に基づいて、新約「ヘブライ人への手紙」は、「エサウ」の態度を否定的に取り上げている(ヘブ 12:16~17)。ただし、同書は、父「イサク」が「エサウ」に対しても「ヤコブ」に対してと同様に「祝福」を祈ったとしている(同 11:20)。「創世記」の叙述が概して「親の因果が子に報い」という観念に基づいているのに対して、「ヘブライ人への手紙」の「信仰」観は「自業自得」(「本人次第」)という観念が強い。

**使徒書日課(ローマ 8 章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。本書簡は、パウロが未訪のローマ教会共同体を訪問することを告げ、その後のエスパニア宣教計画への協力を求めるために著されたものであるが(ロマ 15 章参照)、過去のさまざまな経緯を踏まえて、宣教活動を通じて最終的に到達した調停的でより包摂的な福音理解を丁寧に展開する内容となっている。取り上げる主題には、「ガラテヤの信徒への手紙」と重なるものが少なくないが、議論の展開や結論となる主張は必ずしも同じではない。「ガラテヤ書」で展開した議論や主張を不十分なものと認識し、あらためて修正された議論の展開と結論の主張を示す目的があったものと考えられる。

・パウロは、本書簡での議論を展開するにあたって、「律法」の意義づけに苦慮している。新約の「律法(ノモス)」は、基本的に旧約の「律法(トーラー)」に対応した訳語と解される場合が多いが、ヘブライ語「トーラー」は、旧約正典の最初の五書を指す区分として用いられる場合(これを通常は「律法」と訳す)と、文書中の用語で「教え」という意味で用いられる場合と、二通りの用法がある。つまり、前者の場合は、「聖書」あるいは「神の言葉」という抽象概念を想定しているのに対して、後者の場合は、具体的な内容として「法」や「戒め」などの用語で列挙されるような規則・規定などが想定されている。これらを区別なくギリシア語「ノモス」の訳語で表すことで生じる混乱が見られる。ギリシア語「ノモス」が一般的に「法則」を意味する用語であることも一因かもしれない。日本語訳聖書は、文脈によって「ノモス」を「律法」と「法則」で訳し分けているが、パウロがこれらを区別して用いていたとは考え難い。日課箇所では、2 節「法則」(2 回)、3 節、4 節、7 節「律法」は、すべて「ノモス」の訳語である。

・2 節の「霊の法則」と「罪と死との法則」は、上述の訳語問題を踏まえると、「霊」的な「律法」と「肉」的な「律法」の違いを述べているものと解せる。「霊(プネウマ)」と「肉(サルクス)」は、パウロが対置的に用いる場合、「神に属すること」と「人に属すること」の区別を意味する。パウロは、「洗礼」によってキリストと結ばれることで、人は「霊」を自身の内に宿らせることができるとする。なお、「霊」の内在を証明するすべを、パウロは、「アッバ、父よ」と神に呼びかけることができることのみで十分と考えている(ロマ 8:15~16、ガラ 3:26~4:6 など)。

## 福音書日課(マタイ 20 章より)

・日課箇所は、「ヤコブとヨハネの願い」を巡る逸話伝承として「マタイ」および「マルコ」が共通して伝える箇所。この日課箇所の前段(「主イエスの三度目の受難予告」)および後段(「エリコで盲人を癒す」)を含むまとまりは、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が「受難物語」の直前に導入として置いているものと推認されるが、「ルカ」は日課箇所の逸話伝承を省略している。この「ルカ」の例外を除けば、「共観福音書」は、主イエスの三度の「受難予告」の逸話のそれぞれで、直後に、主イエスの弟子たる者のあり方、その基本姿勢(自分を捨て、仕える者として生きる生き方)を説く教えが置かれており、「ルカ」はそれを重複と見て省略したのかもしれない。

・「マタイ」と「マルコ」を比較すると、いくつかの相違が見いだされる。まず、この場面の導入部で主イエスへの願いを述べるのは、「マタイ」では「ゼベダイの息子たちの母」であるが、「マルコ」では「ゼベダイの子ヤコブとヨハネ」本人たちである。「マルコ」では、もっぱら主イエスに従う信仰者本人の姿勢や態度に関心があるのに対して、「マタイ」では、その周囲の者がいかに接し配慮すべきかに関心がある、ということかもしれない。

・同様の考察は、別の相違点からも導かれるかもしれない。すなわち、願いを聞いた主イエスの応答の言葉について、「マタイ」は「(主イエスの飲む)杯を飲むこと」ができるかとのみ問う叙述(22 節、23 節)としているのに対して、「マルコ」は「杯を飲むこと」と並べて「(主イエスが受ける)洗礼を受けること」ができるかと問う叙述(マルコ 10:38~39)となっている。「マルコ」では、弟子たちが受ける「洗礼」について触れるのはこの箇所のみであるが、この「洗礼」は飽くまで本人が自分の意志で「受ける」あるいは「受けない」を決断するものとして扱っており、「マタイ」のように「弟子たちの教会」が人々に「授ける」べきもの(マタイ 28:19)としてはいない。このような相違は、「マタイ」がすでに洗礼を受けて「主イエスに従う弟子」としての生き方を始めている者たちをおもな対象に想定して、その「弟子」たちがすべての後に続く者に対していかなる配慮をすべきかという観点から教えを整理しているのに対して、「マルコ」がこれから洗礼を受けて「主イエスに従う弟子」になろうとしている本人をおもな対象に想定して、その者たちが自身の決断をどのようなものとして自覚すべきかという観点から教えを整理していることによる相違、と解することができるかもしれない。

・22~23 節「杯(ポテリオン)」は、「最後の晩餐」の場面(26:27)および「ゲッセマネの祈り」の場面(26:39)のほかに、10:42「冷たい水一杯でも飲ませてくれる人」、また律法学者やファリサイ派を批判する言説(23:25~26「…杯の内側をきれいにせよ」)にもあり、象徴的な意味合いが複合的に含蓄される用語として扱われている。

## 来週の誕生日(4月6日~12日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-152「みめぐみふかき主に」(= I 12「めぐみゆたけき主を」)は、詩編 118 を歌うジュネーブ詩編歌。『讚美歌 21』に収録されるに際して、詩編の御言葉に即して改訳。

・21-504「主よ、み手もて」(= I 285 番)は、19 世紀スコットランドの牧師ボナーの作詞に、19 世紀の作曲家ウェーバーの「魔弾の射手」序曲の旋律を讚美歌用に編曲した曲が組み合わせられている。現代の英語讚美歌集ではほとんど採用されていない。

・21-78「わが主よ、ここに集い」は、19 世紀スコットランド教会の牧師 H.ボナーが作詞した聖餐讚美。彼は、1843 年のスコットランド国教会分裂に際し、自由教会(独立派)の指導者の一人。同じ自由教会の牧師であった兄からの依頼で作詞。曲は、英国教会の音楽家 E.ホブキンズが別の歌詞のために作曲。

## 21-152「みめぐみ深き主に」

*Rendez a Dieu l'honneur Supreme*

## 21-504「主よ、み手もて」

*Thy way, not mine, O Lord*

1. Thy way, not mine, O Lord, / However dark it be: / Lead me by thine own hand: / Choose out the path for me. / Smooth let it be or rough, / It will be still the best; / Winding or straight, it leads / Right onward to thy rest.
2. I dare not choose my lot; / I would not, if I might; / Choose thou for me, my God: / So shall I walk aright. / Take thou my cup, and it / With joy or sorrow fill, / As best to thee may seem; / Choose thou my good and ill.
3. Choose thou for me my friends, / My sickness or my health; / Choose thou my cares for me / My poverty or wealth. / Not mine, not mine the choice, / In things or great or small / Be thou my Guide, my Strength, / My Wisdom, and my All.

## 21-78「わが主よ、ここに集い」

*Here, O My Lord, I See Thee Face to Face*

1. Here, O my Lord, I see thee face to face; / here would I touch and handle things unseen; / here grasp with firmer hand eternal grace, / and all my weariness upon thee lean.
2. Here would I feed upon the Bread of God; / here drink with thee the royal Wine of heaven; / here would I lay aside each earthly load, / here taste afresh the calm of sin forgiven.
3. I have no help but thine; nor do I need / another arm save thine to lean upon; / it is enough, my Lord, enough indeed; / my strength is in thy might, thy might alone.
4. Mine is the sin, but thine the righteousness; / mine is the guilt, but thine the cleansing Blood. / Here is my robe, my refuge, and my peace; / thy Blood, thy righteousness, O Lord, my God!